



繪本萬葉文



^ 13  
3332  
5





門へ13  
2332  
巻 5



長者 繪本 黄鳥 填卷之五

遠州小夜中山麓 栗杖亭鬼印著

十八  
本大出版部

源之助 不斗仙 壺洞仙 不逢ふ話

かくて源之助の与惣左五門別を秋葉山へ登山し何とぞ敵  
の行末は去りて免れんと一心に祈念して夫より信濃路へか  
らんともあり梢に鶯の声をれば又唐琴なる人と仰向ハ急々  
我來方と轉りて唐琴が家來る方へ急來きて告るれば  
いざや随ひ行んと其處より付し行はば往還もあはれぬ  
焦夫の通ひ路のうへ飛行するや一と思ひうがく三四里  
山奥へ行くと思ひしが終に鶯の行方なりしを源之助は  
不審し〜かゝる山中に迷ひ來りて唐琴は行衛りたるなり





源之助山中  
迷入賞景  
道去々  
次

源之助



源之助

源之助



免せん角せんと千く心迷ひ又谷と下り峯と攀て三里斗  
来てくろふらるし我五十丈斗の切岸の所へ出り其中段  
と思しき所一丈四五尺なり此樹乃牡丹らんと盛なり  
其牡丹花一丈三三尺ばかりもゆらん見え清白はる  
さしから大輪のがらんゆらんゆらんと近付く見ずなく思  
へも岩を屏風は立ちたるくれば近寄ると叶は遠下  
を見らあまは美くしき門構の家ありかた行田舎へ  
殊に住居ふ何とぞあの所へ行くと藤わらうとつら  
樹の根も取とがりも十四五回も下りたれ細き道り漸お  
下り立ち門の中は指現けは男女やびとしく暮とやす  
門札は諏訪洞仙とあり扱は医家なる人末頂日鶏目あて六ふ

難治せりへがや療治を受く平愈と待信州へ赴くべし此者の  
諏訪と名乗と定く信州の産く人も難斗北国のやうす  
余にわが聞人のと案内とをて誰とてく出るゆわ  
年頃三十をわりのまき奇悪なる男なり源之助頓首して  
やうげへ旅の者らぐ眼疾と患へく瘡用と願ふと一言入  
は此人不審して此所を京丸の里とて中々常体の人乃来  
る所ふあしむいし来てくや殊に表師ハ此所へ来る人の瘡  
治しき事なり出りし時を五十日六十日近国の諸侯へ  
何国に住す事ばあ人なり大家より送迎とるも秋葉  
山まきあしむ夫より漂然とて帰るゆとて仙医なりとせ  
ふ言つては自身此所へ来てく再び帰らるゆとてかたは



家師へと沙汰をいじらるるに――是より元の道へ歸るべきと云  
多れば源之助はうと其人心あつらへて對面は遂に音押て  
言ふれば志くは是非に師の方へ入らざると奥へ入らせその  
時々の牡丹は技ふ驚かすは聞へ出万死有吉と啼けきむ  
扱ハ此と云ふは一旦を難矣と云ふも後の吉事ゆへと心よ  
悦より程よく先の男出さる師只今對面ゆへきと云ふ所へ立  
出る人と見れば年の程は四五六脊たぐり頬骨はき眼もよく  
いらさぬ一癖ある勿体頭をぞん髪衣服の美しき目とせり手  
さまじり源之助とくと見ゆ旅人をいじり此所へ来ると云ふ  
殊に眼疾は患ひ多くと欲委細かきと云ふと云ふも源之助  
答ふる僕も上方に知少より育ち者秋葉権現へ参詣し夫より

道に迷ひ不斗此所へ来り仁術と云ふと見ゆと云ふ我  
鷄目の療治願く押く貴面は移らぬ一早速尊顔と得大  
慶つるまのの昔述べきと云ふ源之助と打詠め足下生年いづく  
よは源之助答へて當年十九才なり此医片頬に笑みふくみ  
まゝ一朝夕も療治さざり此所へゆき返留りゆく  
身心と巻ひく三十日も此所へおはさむ眼疾も宜く人不自由  
の口にあはる弟子ともへやと奥へ入る源之助力を得一回と  
受取く返留るに若き女も多くなり福有りむむかす  
体なり殊に先の弟子もよく念頃ふくむか山家おはす  
なり山海の珍味はめて饗夜はの弟子と一つ所は居寐さす  
いづれも心易く有り底意なく語りいづれも付の弟子言はる



我ハ天下ノ名医トナリテ古郷ヘカケルト誓ヒ立諸國遍歴  
シテ事四五年此洞仙神仙の名醫トシテ濱松ニ至リ聞テ人  
カラウシク此所ヘ来テ師弟の約トナリテ我今の名ハ濱龍門  
トナリテ此家の体トナリテ一向其意ト得テ侍リ醫者ト  
神の妙術アリ此家ホ多ク此男女アリト云フ古郷ヘ歸リト  
又事法聞テ折節一人ヅ行方志スル事アリ身眼疾  
愈テ人トモ容易ホ帰テ事カクテ足下の身の上トモ  
シテ事法語テカト成テトナリト眞實面ホカクテ事  
々ホ源之助本心法明カヤと思フト一大事ナリト云フ  
カクテ人トモ云フ志スル世ノ志マヤ人我ヘ加賀乃國  
佐ノ本源太左エ門トヤ者の忤テ知テ父ホワレ母ト云フ

上方めク育レドモ何トモ父上ホダテ達んと諸國遍歴ト  
シテ今ホ有所志スル身ノ眞心ト見ぬキト明  
ク何率佐ノ本源太左エ門ト名乗人トナリテ事  
言テ夫ト孝心ナリテ知テ少ク別シテ父  
ノ貞ト云フ事ト云フ名乗テ源之助答テ仰の通り  
貞ハ云フ事ト云フ此割并の行テ人ト云フ父ホワレ母の  
物語ト云フ誠ニ云テ左門モ殆感心ト云フ来モ随分ト心  
トつけ其人ト尋出テ逢セテ云フ云フ我身モ此身ホたの  
一条アリ其子細ハ此所ヘ来テ折テ都ホ放蕩ト云フ  
云フ頑城故アリテ自害セテホカクテ其妹ト出會ハシテ  
云フ中ト云フ侍ル事ト云フ以師匠洞仙此女ト云フ心ト云フ



いづも曾も美引せび早く衣身諸も此所と遣は出さし  
毎いたのむといへども衣と師洞仙が秘法の一巻と授けりま  
中く女は迷ひて逃去心ありば此身此所あり快服あり  
衣いそり人志まをど出さし其時女と具し京  
母がりく渡りあまをうする時と常ふ師匠と女とのゆ  
とや中不快のやうさうも足下と此所と逃出さし師乃  
うがむも消え秘法の巻物と授けり人事業の内より其後心  
まがふ衣へ京都へ赴く處へ偏ふこのころ白赤ら  
ふがうと頼むれど源之助頭とあういふも安さほひふ  
衣もつらき身ふく婦人としてく同道せんといふと之は  
まは龍宣よとあり足下の心底あつる今この事

かろくばたのそふと約束し夫よりいひきて念頃お  
りもわたり

源之助危難復讐の話

斯く源之助を日服菜し難目も平愈し三十日むり  
ゆもち身心壮あり殊ふ山海の珍味と給ゆゆも大  
肥満し顔色もはやくと見え今ハ主人ふいと  
行むやとさめぐ礼謝し別と告ぐ洞仙脈と  
かろく大方平愈し今暫く服菜してと言ふれど  
此家ふろくときき所ふらむといふと願ひ  
走るる免も角も志す衣後園ふ未曾有のふあり  
土産ふ見とべいといふと先立も伴ふ行く源之助其後



随い真深く庭のくく歩行々々其廣きゆりゆり  
 十二三町も奥へ来々々と思ふ所は路次あり鏡前か  
 是と聞々猶奥あつて行々々にまきりに悪臭くくは源之助  
 其ゆりゆりを見まへ人の骸骨ももも浅間やと退り  
 ろにかくと落し穴へ落入り洞仙もも源之助と穴の  
 めりり高き手小手ふいすり引上り源之助も忙然と夢の心  
 地りり其いりんとまへ洞仙大火鉢に炭火をせし  
 源之助が兩腕とぬがせ左右の柱へくく付腕の下へ火鉢を  
 置汝さぞ不審ふ思ふ人此度濱松の城主高橋九門の  
 子息兩腕ふ病ゆりり作を付々々是と治もは同年の  
 人の兩腕の油とゆり葉ふ和り用りゆりゆり汝十九才といひ

彼若殿同年くくは其葉よせん心よく逗面さしこ  
 泰隱家へ来々々の半り帰るゆりゆり泰居所と考る者  
 かり運尺で迷ひ来りり自業自得なり山海の珍味と与へ  
 油と多く取らんと三十日も饗宴なり油取と跡はらの通り  
 ふ打殺し死骸をつつやゆりり療治しゆ兵人と白銀の鉢  
 と片手ふもち火鉢あつぎ立まへ源之助仰天くく泰はふた  
 望々ゆりゆりのなりいふも油と取らり事い是非なり何と  
 跡の命を助下さるる死もは隱家と口外いとはは情  
 み聞沢さび多くと雨の如く涙と流し願ひ多くと耳をさるる  
 次第ふ火氣盛んよるまへ源之助が苦痛ゆりゆりもゆりゆり  
 火のくくあびまへゆりゆりのくくも是れはゆりゆり増々き洞仙





源之助死地  
墜入危急乃  
難小逢







おせー残念さうよ今又手負ふ水とゆへと承と殺さん手り大  
人やうに安穩よやへきやと立上るとどろに力なきこは惜  
やと持てる斧手裡釵ふくと打辰丸門早く袖より打拂  
ひ扱と帯と名を先生めりやう九重がうり  
家自害させしふゆへに此所へ門人と成り来り  
これと九重が同夫十三郎とてきりてきりて洞仙谷へ  
夫は汝ら書置しりゆき家方へ入門の神文とて扱と心  
付折し九重が妹と見ると驚し扱と扱と十三郎と  
知しゆの女も心とゆへとせんとき辰丸は暮り残念さ  
罵しと丸門より昔むし今へ師弟の約束はいつと師と  
殺し心あらん身の火は消さんと水と何の心もつるを

付しゆせん水とゆへと見しゆの事と見ゆり  
秘書の一卷と授けりしと起せし急所の痛手水と吞  
きしと次第くふと果終ふあつら死めと死しと丸門も  
初九重が客帯と事とて今師匠の因とるを  
つりやと涙ぐむと承此所ゆへ醫術の秘書と得人為  
なり小事ふかり場ふり懐中押あけ一卷と取出し逐  
一ふ見し信州の山奥異人よ此書と得る自在は得し  
事且奥書とて讀終り大に驚傍伏し源之助  
水とゆへ呼し源之助息吹入丸門と見打り  
足下の介抱めり活命と得り不道の洞仙ゆ手掛  
しり足下師匠の敵と思え勝負もせんが先もり如く父

洞仙伝巻之五



わがり達すも命と承ふ預けまゝと涙とらりて流せば龍門  
も涙と押へ其元ほど世ふ不幸の人をゆゑと所詮生て居ら  
まざる身るれば其相口あまう切腹し久承介錯せんと言けり  
源之助不審しいうる訳あり切腹とてあまうとぞ龍門答へ  
るれば足下の親殺しなり其いけり只今洞仙の鑿術の秘書と  
取出し見るとの事加州の住佐木源太先王門とあり扱はたつ  
るふ足下の親なる事と初とて知ぬ事と人言やうら  
年来尋る親と手あけ生る居る事と切腹とてあ  
まの朋友のよきと聞たり源之助はゆくと起其二巻斗  
あま承親との證據も成がらん龍門又のふまればう  
いありに取前承ふ意趣ありとて打つけらるる此并其元の

懐中と合て見らしきよとらるるにがやと取出し引合を  
合紋まの合多れば源之助は踊りたり刀はぬらげ洞仙  
が首打落せむ龍門と仰天し是は正しく狂気と目ゆ承  
真の親と聞けり首打落しむのあまきや源之助は耳あ  
かけごと天へもよる心地しむることを不審ふゆいふらん今  
何と包ん我の河内の国鳴野の郡司佐木源太先王門は源  
之助といふものなり加州の佐木源太先王門と父とてこれ心  
尽しとてつとつとつと父の敵ともきび討つる事れら  
かゝるは此并の島田の宿ゆゑ家来へ打つけし手裡に  
ハ手がらふせよと渡せし割存なり承を此者の為の家  
叔父源吾と押領せし母とも叔父を殺されを兎とまてなり







源之助秋葉山



源之助秋葉山



下りし長柄長者の娘梅がえ豕不憲慕すゆゑ暫く  
聳とくろくしども俱不戴天の仇を此長者が許とも立  
退千辛万苦しつたげ終るふいふ今月今日いづる吉日  
そやと懐中より父の位牌取出し首は手向よりさびを  
ふらむとく九門又やどろきく足下長柄長者の聳ふ成り  
と歎扱とくつれをうしなり何とる色人豕こそ長者が甥十三  
郎といふものあり最早国と立退五六年も音信絶ふを  
いと心ふからしむが足下逢ふり不思議なり豕ハ秘書  
一卷伝へり得し古郷へ歸り叔父お勘當のゆゑと受ん  
かひも足下おたのしむ重なる豕家京都へ伴ふべし此豕不  
とくしむ者どもこの國所とく夫へ歸しつる人足下ハ

父の仇は討まじ一刻も早く河内へ赴き母の敵と移し  
多是より尤も人三十丁斗行へ様子阪ともうけり是洞仙が  
開道お人のあつ所あつは是と登る瀆松海道へ出  
急ぎ多とつひ多む源之助も其深切とよほこ例の竹杖  
かお揚子阪へ急ぎ多於此時賞いさもくしげふ三声啼て  
何地ともく飛去つる傳

作者鬼卵曰此京丸の牡丹今ふわり予其花む  
と見しに多し清白く渡し一尺余り花乃  
大き三尺余といひ傳ふまても我こそ於巖るは  
人かめく其所へ行事かよと落花溪へ流る  
と拾ふのそかり此牡丹恐らく石花るん代



偏日縣武口塞の石上、有花如堆心牡丹枝葉  
僚僥雖精於画者莫能及之、又京丸の里  
も昔平家の一族落来り、所も又洞仙京よ  
り多く人と買来り、所も此里にかり、都の  
詞うらひ、今ふおつ、京談より

十三郎長柄長者の古屋鋪、て怪異ふ達話

夫より十三郎の洞仙が家内、捕りまゝる者どもと貯け、  
金銀などふり、悪人か、師弟の毛を結び、六  
蔵畧、とて、ふり、亡骸と厚く葬り、落も、取  
片付ハ重、以伴、い都と、立出、此ハ重と、六九重が  
妹、ゆ、京都壬生の辺、母と、暮、ハ重

自害、り、い、貧、く、烟、之、立、兼、一、母、大、病  
と、煩、い、い、ん、も、せん、を、金、か、き、い、ハ、重、身、と、賣、ん、と、間、合  
々、ふ、田、舎、の、人、商、人、其、器、量、と、見、り、金、五、十、兩、不、調、へ、  
ハ、重、ハ、其、金、を、書、ゆ、れ、と、之、近、所、に、頼、り、置、此、人、商、人、と、俱  
上、京、丸、来、り、と、源、太、九、門、九、重、が、妹、事、と、あ、り、  
と、口、説、り、ハ、重、心、ふ、と、い、つ、十三郎、  
馴、漆、一、り、十三郎、も、九、重、が、遺、言、な、れ、ハ、重、と、九、重、と、  
り、母、も、養、ん、と、約、せ、い、あ、り、ハ、重、も、此、度、虎、口  
と、の、母、と、對、面、し、と、悦、び、十三郎、の、後、も、京、都、に、立  
歸、り、此、時、母、ハ、重、が、残、り、金、も、近、所、に、世、話  
々、病、ハ、平、愈、せ、ハ、重、が、心、と、井、は、り、明、く、泣、



十三郎  
八重と  
老母へ渡人  
都へ来る





何れもふゆりくハ重十三郎渚とも一殺立たるふり  
立歸り遠州のふりも落もつゝ物治るるれ母の悦し  
大なるは十三郎が心底と感ト一兩日もあつた十三郎  
とらへ家九重と別もつゝ俱く自害せんと思ひしが九重  
の靈は田くも魚も本意のどく仁術を天下お恐る者  
が九重と女房とまじり九重と名乗らん此上の追福を叔  
父ハ是より叔父長者が方お行勘當のこびともまじり  
ふを對面も願はんハ重ハ母の介抱せよと言のこして浪  
花へ趣さつた此日を伏見より船よのりつゝふ東合の瀬  
世ふも不思議の事もつゝの哉近頃世ふ鳴響し長柄

長者何者なり殺さし其跡を絶果く近頃ハ化物屋鋪と  
なりつたつものうらまこと聞より十三郎胸うちらたこ如何を  
驚しがかや事ハ虚脱あつたのなりいづれ兄弟の娘も有  
忠太夫といふ忠臣の侍男といふ事ハ早入相の所へ小言  
のわづら場より船上りし見まば早入相の所へ小言  
々まば其つゝの民家ふ入る長者のやうと尋々ふ襪や  
ふのめつゝ如く姉姪と大仁といふ僧ふ殺され間も  
長者も殺され多し妹姪忠太夫も行方なくなりしと聞  
少堂仰天せしやとて詞もつゝしがせまき今宵ハ  
其古屋敷へ立越叔父の居間よ夜と明し不幸の信と  
位牌もつゝせんめと立上るは里人ゆゑか



者の古屋鋪へ行きて事なつて近頃妖怪住み諸人伝  
 なる事し七ツとびの頃と里人も門前とて通る者なし  
 ひふふ田とて多とらひこれと家由縁きた者うとらひ何  
 ど化物我とたぶらかさんと袖より拂ひ長者が門内へ入る  
 實も古書は天道毀盈といひしをくわすさゆおもぬす  
 庭へ夏州びくくと生繁と其つらり蝙蝠まひ歩行つて  
 せださまひをうらるし哉間々奥へ入ぬまば物とてき事いん  
 ださるし十三郎の只徃事の夢と叔父の居間おつり火打  
 袋より火打よりつら線香へ移し念佛して轉變の世  
 の中河觀しとて涙ふむせびたり時よ夜半とて頃庭  
 の夏州の陰より陰火をえ出ると見えしが白きいとくま

髪よりさげ鉄櫛をゆくと付くる女の古井の中よりとて  
 くとりつらり十三郎の方へ来る扱を聞し妖怪とさんたれと  
 眼をくにもせ灰守と居たりこれ此勢と恐もさん此幽冥  
 又古井の中へ入り時ふりしろの襖とて開く同トやうなる  
 幽冥立出十三郎が前ふ来るととて泣十三郎の物とも言は  
 正体と見え届んと鰐えつらり白眼居たりこれ此女も元の  
 所へ入りつらり見るともおとほしき姿の者つらりれ  
 出たり頭をさやぐまのどく面の色朱より眼の光をささぬ  
 下に鉄杖打ち十三郎と眼をけ飛つれを常体の人なし  
 何と叫んで倒るべし十三郎へ生捕ふせんとつらりこころを身と  
 ひ後終よりの化物と取り敷已何者うればか冥冥形





忠大天

忠大天

木



十三郎

十三郎  
長春の  
殿屋鋪  
小宿  
怪異  
正す

糸才



形と云し諸人とたゞうとをまひとて白状せざらんつと殺  
ぶしと強く押つらまひ彼化物とて待たやべし事い  
とつひと大膽の十三郎引起し家前より幽霊の  
人間より事ばあつと女の手相手を汝家の手向ふゆ  
かく振廻らり事り早くつと悠々と述はるは化物  
頭と下け誠は君を豪傑めく師も子も何と包まん  
豕く人間あつと坐ひ此所へ来り人々の甲乙をうろて  
たのもやふれりゆあかく手ひひども是まぐ皆と逝去り  
一人も君のぞくさる人ふ出會やふれ豕くは敵と稱し者  
久も有ふ甲斐なれ老人女ふゆ何率助太刀ふ成るに  
人とたつ頼もあつとせんとかくいひまふせりるつれ

は情よかばと人敵と討せまひと涙雨は多し真実と  
つらつといふれが二人の女もすほび出何とぞ助太刀  
とまこと声とをうりに歎き十三郎打うらひき其敵と  
稱し者何者なると何とらふものぞされが敵とや  
並々の人ありは城州淀の城主淀と惣左卫門と人あり  
豕くは此家の主長者が娘とら木家来忠大夫親代  
やとのなるつ頃主人長者は淀と惣左卫門お討せ無念  
骨髄ふ通るとつとも甲斐なれ婦人老人ゆあかく明屋鋪  
とつと化物屋敷とらひやし其人とらわしひふは身  
れと英雄と得しと全くと主君の亡霊引合つとらん  
と三人悦と限らまゝ十三郎も驚扱ハ橋本忠大夫にて有

巻の三十一



くらり家ハ甥の十三郎之諸国遍歴し医の奥義を  
 得夫と功ハ勘當の侘せんと来りしふか不慮の事あり  
 有しとゆも似どい成訣ぞと問人人もなれば汝ホガ行  
 方と翌と尋人と思ひし此所ハ通夜せしと聞三人  
 の者まじく驚きと扱いたやうふらうく飲家君も何率十三郎  
 と尋出し勘當ゆ一兵とえぐ宣ひ一昔も似ず此  
 心まで極くしく成りしれりしよ此上ハ拙者家君より  
 かり内勘當の事一参する間何とぞ与惣左エ門と討く  
 家君の修羅の亡執ともしりしと樓本渚も袖おす  
 して泣れぬ十三郎も感心し一うぐ頼むの事しん家も  
 同く歎けり志し与惣左エ門と歎けりし澄ぼくしりわ

忠太夫言へしいふも先達し川渡御用のせの金子三千兩  
 家君貸買ふ其金返濟しし自來し其金とく  
 や成らん密ふ家来と忍びて金取人とせしと家来やく  
 土蔵へ納しゆ金と奪りしとらも情もも主人は  
 甚る盤めり頭と打割逃出しと家其音ふ地をき馳  
 付しとんとせし彼合印の羽織衣手み残りぬし裏門  
 へり逃去しし所詮歎の大名もむか容易ふ討た死事も  
 思ひしびのめ金銀財宝を地中と堀能く埋め置姫君  
 ありとも此家を立退しし由はな一密よ立帰しかくれし  
 討たひいしと始終は活つたれ十三郎も忠太夫代々忠  
 臣と感しとる未だ心底を嬉しし梅がえが横死といし誓



涙なみだおむせむせびくくびくくかかの澄あは據とああくくの謀まめめぐぐししと惣とたた工工  
 門かどと討う屋や一ひと志こころくく大敵おほてきををむむかうかうののままささかかがが家いえハハ彼かが  
 見みええくくささららにに幸さいひふふ安やすななかか付つけけくくべべにに汝なをを猶なほもも此こゝ終しまふ  
 世よとと思おもひひ豕うさぎ音ね信しんと待まちべべくく尽つぬぬ物もの語ごふふ夜よををああららくくとと何なに

小斗こ糸いと

繪本黄鳥墳卷之五終



